堀川式ゴーストペイマシンション

作：保冷剤
画：鳩里

【一日目】

堀川雷鼓は追われていた。

時刻は午後四時、じきに陽も傾むこうかという頃。人里の外縁にあるスラムを息を切らせて走る。もう数ブロックも進めば、あるいはもう数十分もすれば人の住まう世界から人以外が住まう世界に変わるその瀬戸際に、彼女は迷い込んでいた。

空き家ばかりが点在する小径に入り、視線を遮る場所を見つけて潜り込む。上がった心拍をどうにか整えようと深呼吸を繰り返しながら、猛烈にふらつく頭でなぜこのような事態になったのかを振り返った。

きっかけは、果たしてどこまで遡れるだろう。

一時間ほど前、プリズムリバー楽団の解散会見が開かれた修羅場に、雷鼓もまた立ち会っていた。騒動を仕組んだ張本人として、姉妹に降りかかる言葉を自分もまた受け止めねばならないという義務感からそこにいたのだが……なぜ、こんな状況に陥っているのか。まるで思い出せないが、逃げなくてはならないということだけは、妙にはっきりと雷鼓の中に実感があった。やはり頭がふらつく。思考が上手く定まらない。

壁に寄りかかった彼女はそのままずるずると地面に腰を下ろしそうになる。しかしこの腕を掴み、強引に立たせる者があった。

「雷鼓さん。局面はまだ切り抜けられてないですよ」

やや遅れて雷鼓と同じ場所に潜り込んできたのは、射命丸文と名乗る鴉天狗の少女だ。キャスケット帽に大時代的な背広を合わせ、人懐っこい笑顔で人里を闊歩する彼女はしかし今、雷鼓の隣で鋭い目を周辺に走らせている……そうだ。彼女が居なければ、雷鼓はとうの昔にその身柄を押さえられ、どことも知れない暗い場所に連れ去られていただろう。だが元を辿れば、雷鼓は文からも逃げていたはずだ。呼吸が落ち着くとともに、曖昧だったいくつかの事象と雷鼓の抱いた感情が、ひとつの線に繋がり始めた。

「解ってるわ。少し、疲れただけ」

かぶりを振る雷鼓。ひとまず距離を稼げたと知った文は、一息ついて携帯端末を取り出した。

「今のうちに助けを呼びましょう。あなたを追っている一団は不自然なまでに巧妙です。重火器で武装し、人数を組織している上、まるで気配を感じさせない。間違いなくプロでしょう。周辺への被害を抑えるために私たちを人気のない方向へ誘導しています――ええ、私たちは逃げているつもりで、その実追い詰められている。このままでは人里の埒外に突き出されるのも時間の問題だ。周到に準備された、巻き狩りを連想させ